

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和元年度病虫害発生予報第11号(2月)について

このことについて、病虫害発生予報第11号を発表したので送付します。

予報第11号

害虫防除を徹底しましょう

12月の気温が高かったことも影響し、1月の予察調査では、ハダニやアブラムシ等害虫の寄生株が平年より多く確認されました。引き続き気温は平年より高いと予想されており、さまざまな害虫の多発が予想されます。
害虫は多発すると防除が困難になるので、発生状況に注意して適切に防除しましょう。



<予想される向こう1か月の天候(令和2年1月18日~令和2年2月17日)>

日本付近には寒気が南下しにくいため、向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。
低気圧や気圧の谷の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い 見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い 見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並 の見込み

(福岡管区気象台 令和2年1月16日発表抜粋)

2月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	2月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	灰色かび病	多	多	やや多
	ハダニ類	多	多	多
	アブラムシ類	多	多	多
冬春ナス	すすかび病	並	やや多	多
	灰色かび病	多	多	並
	コナジラミ類	多	多	多
冬キャベツ	菌核病	並	多	やや少
	コナガ	並	やや多	並
	アブラムシ類	多	多	多

【野菜：冬春イチゴ】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病株率 0.1%

(平年 0.02%、前年 0.01%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

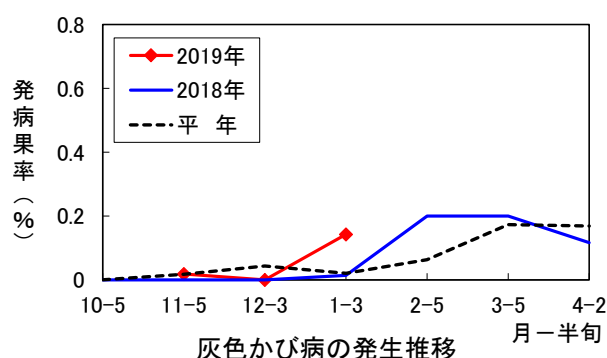
イ 収穫後の果梗は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。

ウ 罹病果や罹病葉の早期発見に努め、見つけ次第速やかに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。

エ 株元まで薬剤がかかるよう、丁寧に薬剤散布する。

オ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

カ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 6の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

寄生株率 23.9% (平年 11.5%、前年 4.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

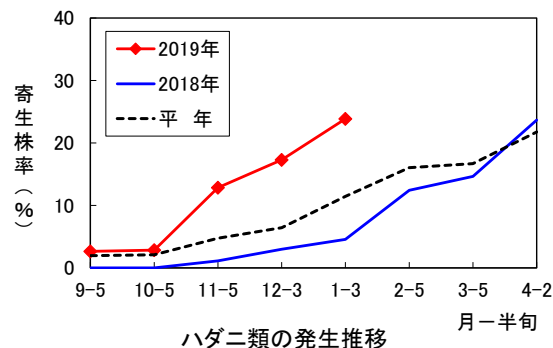
(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウス内外の除草を徹底し、本虫の増殖源を

絶つ。除草した雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。

イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。なお、防除は摘葉後に行くと効果的である。

ウ 薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、気門封鎖剤も含めて異なる系統の薬剤をローテーション散布する。また、ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏し



- いため、葉裏に薬液が十分付着するよう防除を行う。
- エ 天敵を利用する場合は、薬剤の選定に留意する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生株率 5.6% (平年 1.2%、前年 0.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

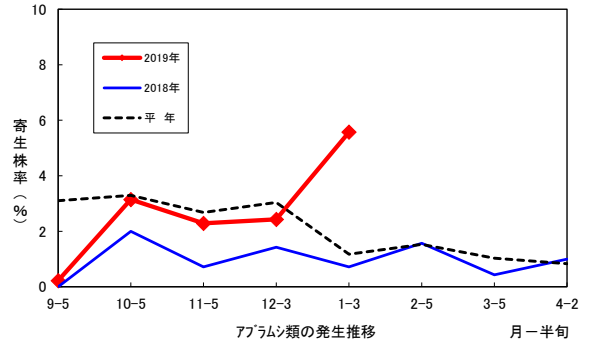
ア 하우스内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

ウ 薬剤感受性の低下を防止する観点から、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。

エ 新芽や新葉、花蕾などに寄生することが多いので、寄生部位に薬液が十分付着するよう、薬剤散布を行う。

オ 軟弱徒長すると発生しやすいので、窒素過多にならないように注意する。



【野菜：冬春ナス】

1 すずかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並みであった(±)。

発病葉率 10.6% (平年 12.3%、前年 3.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理に努める。

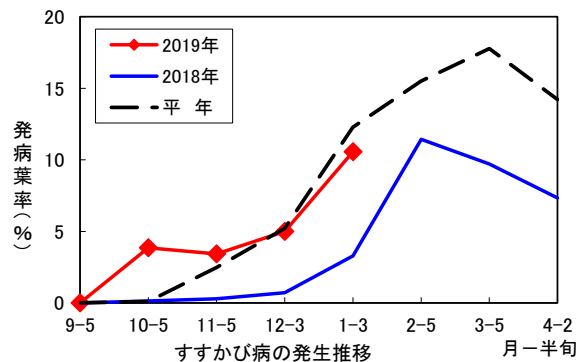
イ 適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

エ 病勢が進展すると防除が困難となるため、初期防除を徹底する。

オ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

カ すずかび病の防除薬剤の中には天敵に悪影響を及ぼすものがあるため、天敵を利用している場合は、薬剤の選定に留意する。



2 灰色かび病

(1) 予報の内容

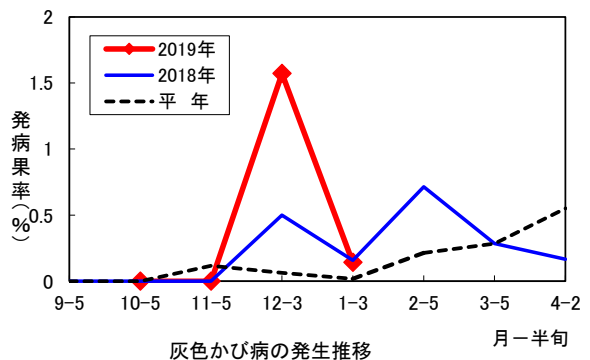
発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病果率 0.1% (平年 0.02%、前年 0.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 低温で多湿の場合に発病が多いので、適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。
- イ 発病葉、発病果は見つけ次第除去する。
- ウ 病勢が進展すると防除が困難となるため、初期防除を徹底する。
- エ 品種によっては、本病害が出やすい傾向にあるので留意する。

3 コナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

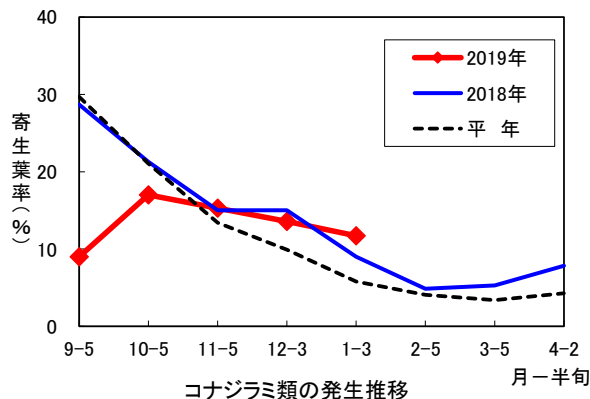
ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生葉率 11.7%(平年 5.8%、前年 9.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス内外の除草を徹底し、本虫の増殖源を絶つ。
- イ 早期発見に努め、初期発生のうちに防除を徹底する。なお、薬剤は葉裏まで十分付着するように散布する。
- ウ 薬剤感受性の低下を防止する観点から、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。



【野菜：冬キャベツ】

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

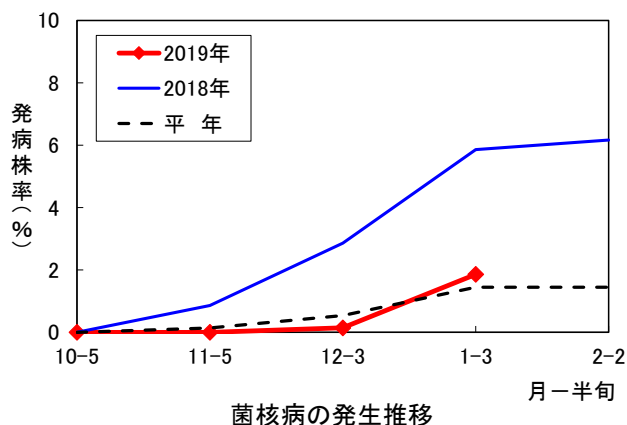
発病株率 1.9%

(平年 1.4%、前年 5.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病株は早急に抜き取り処分する。
- イ 薬剤防除を行う場合は、株元に薬剤が十分にかかるよう、丁寧に散布する。
- ウ 発病株が確認された場合は、収穫後に反転耕を行い、5cmを超える深さに菌核を埋没させる。
- エ 次作での発生を低減させるために、多発ほ場では水田転換や夏期の湛水、輪作を行う。



2 コナガ

(1) 予報の内容

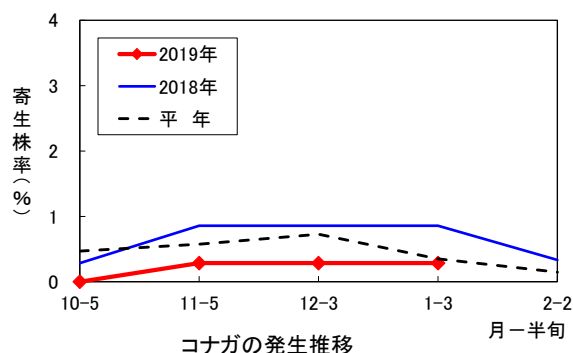
発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 0.3% (平年 0.4%、前年 0.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると結球内部に侵入し、防除が困難になるので、ほ場の発生状況に注意し、発生初期の防除に努める。

イ 薬剤が効きやすい若齢期の幼虫を対象に薬剤防除を行う。

ウ 一部のジアミド系薬剤で感受性が低下している個体群が確認されているため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	現況 (発生量) 平年比	2月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
		平年比	前年比	
冬春イチゴ うどんこ病	少	並	多	<ul style="list-style-type: none"> 適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。 罹病果や罹病葉の早期発見に努め、見つけ次第速やかに取り除く。 収穫後の果梗は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。 病勢が進展すると防除が困難となるため、初期防除を徹底する。 古葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。
冬春ナス ミナミキイ ロアザミウ マ	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> ハウス内外の除草を徹底し、本虫の増殖源を絶つ。除草した雑草はハウス内に放置せず、ほ場外に持ち出して処分する。 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないように散布する。なお、薬剤抵抗性の発達を回避するために、同一系統薬剤の連用は避ける。 天敵を利用する場合は、薬剤の選定に留意する。
ハモグリバ エ類	やや多	多	多	<ul style="list-style-type: none"> ハウス周辺の除草を徹底し、侵入源を減らす。 早期発見、早期防除に努める。 発生を認めた場合は、被害葉を放置せず、摘葉して焼却するかまたはビニル袋等に包み込み、完全に死滅させる。
冬キャベツ 黒腐病	少	少	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 発病株は早めに掘り取り処分する。 多発ほ場では、アブラナ科以外の作物を輪作する。
アブラムシ 類	多	多	多	<ul style="list-style-type: none"> ほ場周辺の雑草管理を徹底し、発生源を除去する。 薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

作物名 病害虫名	現況 (発生量)	2月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬レタス 灰色かび病	多	多	多	<ul style="list-style-type: none"> 多湿の場合に発病が多くなるので、トンネル栽培では換気を行うとともに、ほ場に水がたまらないよう排水対策を実施する。 発病株は抜き取り処分し、直ちに薬剤散布する。 薬剤を使う場合は、地際や茎部が主体となるよう丁寧に散布する。
菌核病	やや多	多	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 発病株を見つけたら、速やかに掘り取り処分し、灰色かび病との同時防除を行う。 発病株が確認されたほ場は、収穫後に反転耕を行い、5cmを超える深さに菌核を埋没させる。
腐敗病	やや多	多	多	<ul style="list-style-type: none"> 凍害を受けると被害が激しくなる。 収穫期には感受性が高まり、収穫が遅れると突発することがあるので、適期収穫に努める。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所